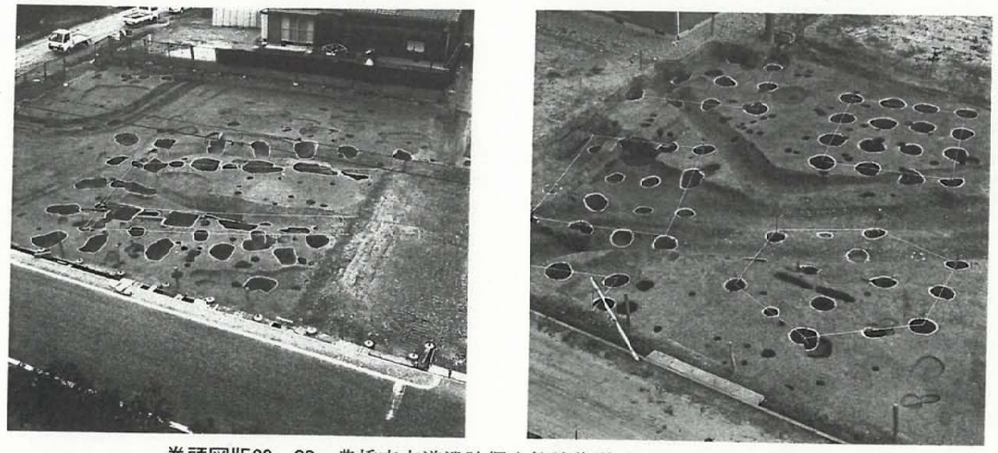
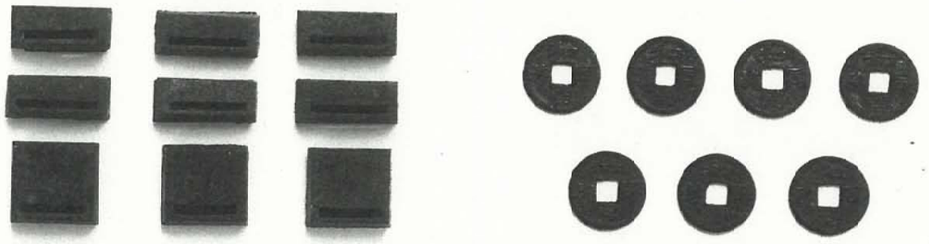


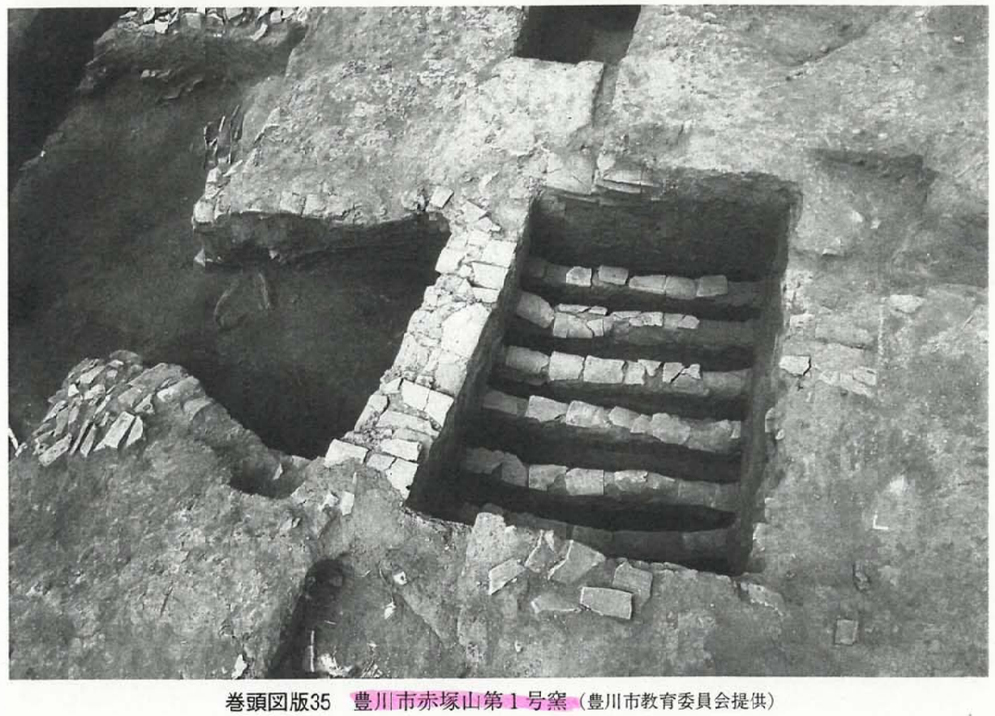
巻頭図版28・29　豊橋市市道遺跡掘立柱建物群（豊橋市教育委員会提供）



巻頭図版30・31　豊橋市市道遺跡出土　鍔帯金具（左）　和同開珎（右）（豊橋市教育委員会蔵）

巻頭図版32・33　豊橋市市道遺跡出土　鉄鉢（左）　火舎（右）（豊橋市教育委員会蔵）

巻頭図版34　春日井市西山製鉄遺跡製鉄炉跡（春日井市教育委員会提供）



巻頭図版35　豊川市赤塚山第1号窯（豊川市教育委員会提供）

『愛知県 資料編 4』より

168　赤塚山古窯（あかつかやま）（県遺跡番号 800028）

豊川市市田町東堤上

図１　遺跡の位置（２万５千分の１　御油）

遺跡の立地

遺跡は、三河国分寺跡の北東約２kmの赤塚山南麓に位置し、標高は約30mを測る。古墳時代から中世にかけての複合遺跡であり、遺跡は現在赤塚山公園の敷地内にその大半が盛土保存されている。

調査

三河国分二寺所用瓦の窯跡とされていた遺跡であり、都市公園の建設に先立ち、市教育委員会が1990～92年にかけ、合計2,287㎡の発掘調査を実施した。その結果、古墳時代後期には横穴式石室を備えた円墳（赤塚山第１号墳）が構築され、奈良時代には集落として存在し、やがて平安時代を迎えると、国分二寺の補修用瓦を生産した瓦工房が断続的に営まれていたことが判明した。

層序と遺構

遺構は、いずれも山麓緩斜面の黄褐色土層（地山層）を掘り込んで構築されており、古代の遺構は集落の営まれたⅢ－１期（報告書時期区分：８世紀後半から９世紀初頭）と、瓦窯及びその工房が営まれたⅢ－２期（９世紀初頭から９世紀末）・Ⅲ－３期（９世紀末から10世紀末）に細分できる（図２）。

Ⅲ－１期の遺構には竪穴住居10棟があり、いずれも方形プランで、カマドは東壁中央に設けられたものが多い。Ⅲ－２期は国分二寺の伽藍の建て替え、葺き替えや修理に伴う補修用の瓦生産のため本窯で操業が開始され、断続的に瓦の生産が行われたと推定される時期であり、瓦窯３基とその工房が検出されている。瓦窯はいずれもロストル式の平窯であり、飛雲文軒平瓦などを焼成した第１号窯（図３）は、操業中に焼成室を縮小する改修が行われたことが確認され、ロストル式平窯の採用にあたり熱効率を高めるため試行錯誤が重ねられた様子がうかがえた。また、瓦窯西側のＤ地点で検出された工房関連遺構には、掘立柱建物６棟、粘土を貯蔵した直径１m前後の不整円形土坑多数、竪穴住居廃絶後の凹地を利用した粘土溜り１か所などがあり、瓦窯に伴う工房空間の遺構の広がりが把握された。なお、Ⅲ－３期は、Ⅲ－２期同様瓦窯が操業された時期であり、三河国分寺系瓦のなかでも最も後出的な瓦を生産した第２号窯をはじめ、Ｄ地点では掘立柱建物、小型の礎石を伴う建物、小型の竪穴住居、小規模な粘土溜りなどが検出され、この時期にも前時期の空間利用を踏襲して瓦窯と工房の操業がなされたことが判明した。

出土遺物

集落が形成されたⅢ－１期の遺物には、須恵器、土師器のほか、竪穴住居SH１から出土した土錘、SH３から出土した鉄鎌などがある。また瓦窯が操業したⅢ－２・３期の遺物には、各瓦窯の灰原や周囲の瓦溜りを中心に出土した多量の瓦塼類がある。第２号窯焼成室からは、およそO－53号窯期に比定される灰釉陶器が出土していることから、第２号窯廃絶の時期は10世紀半ばを大きく下ることはないと推定される。報告書では、これら国分寺所用瓦の本窯での出土状況と、三河国分寺跡における各

軒瓦の出土状況を勘案して、図４のような三河国分寺所用軒瓦の編年が示されている。

遺跡の特徴と意義

三河国分寺跡、国分尼寺跡という消費遺跡の調査による軒瓦の変遷試案が、生産遺跡である本遺跡の調査結果を踏まえて検証できた意義は大きく、今後は、未確認の国分二寺創建瓦を生産した遺跡の様相解明が急がれる。また、瓦窯のみではなくアトリエにあたる工房の遺構がセットで検出され、当時瓦屋と呼ばれた瓦生産現場を総合的に把握することが可能となったのも大きな調査成果である。官営瓦工房の様相を帯びた本窯における瓦生産の実態解明については、今後も国分二寺跡や国府跡の調査の進展に合わせ、再考を加えていく必要があろう。

資料の所在

豊川市教育委員会

参考文献

林　弘之・前田清彦　1994：『赤塚山』豊川市教育委員会
前田清彦　1995：「三河国分寺系軒丸瓦をめぐって」『三河考古』８

（前田清彦）

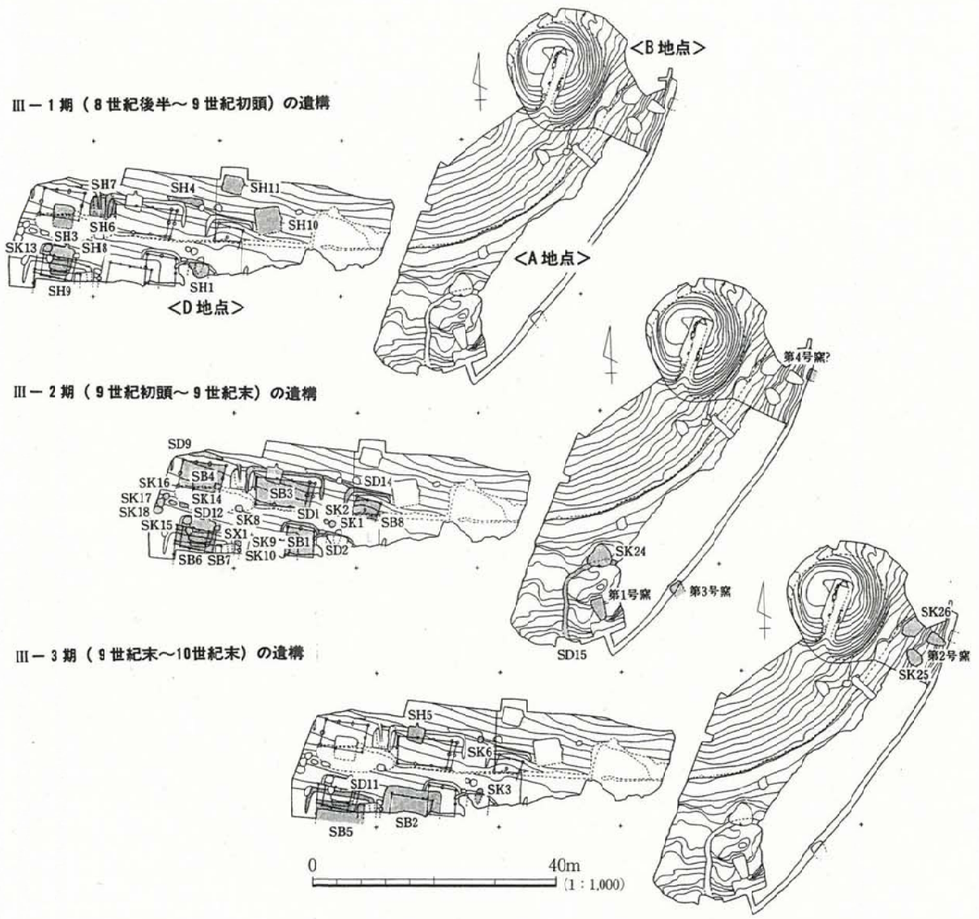


図２　古代の遺構変遷図（林・前田 1994より）

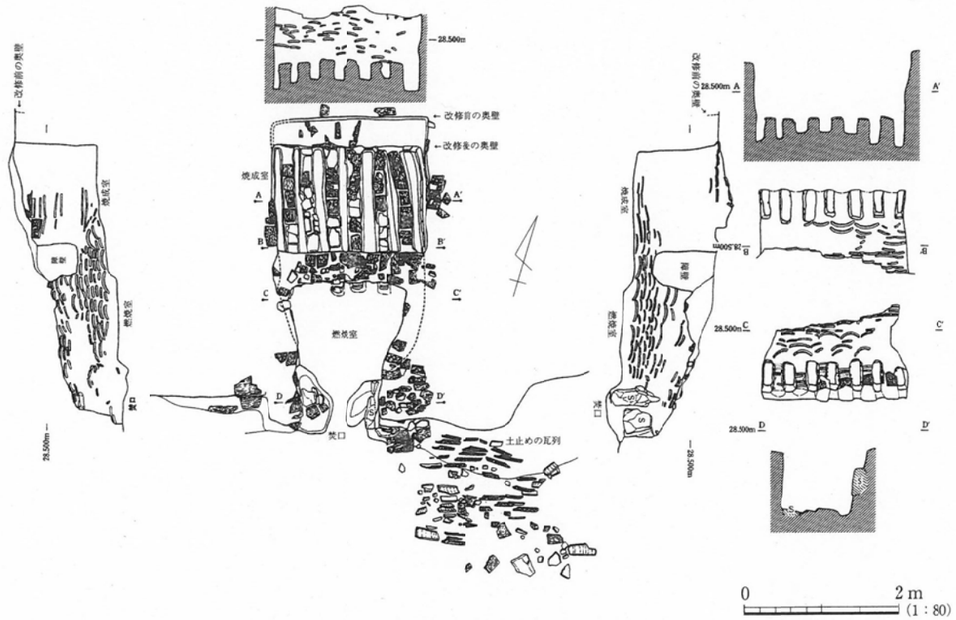


図３　第１号窯平面・断面図（林・前田 1994より）

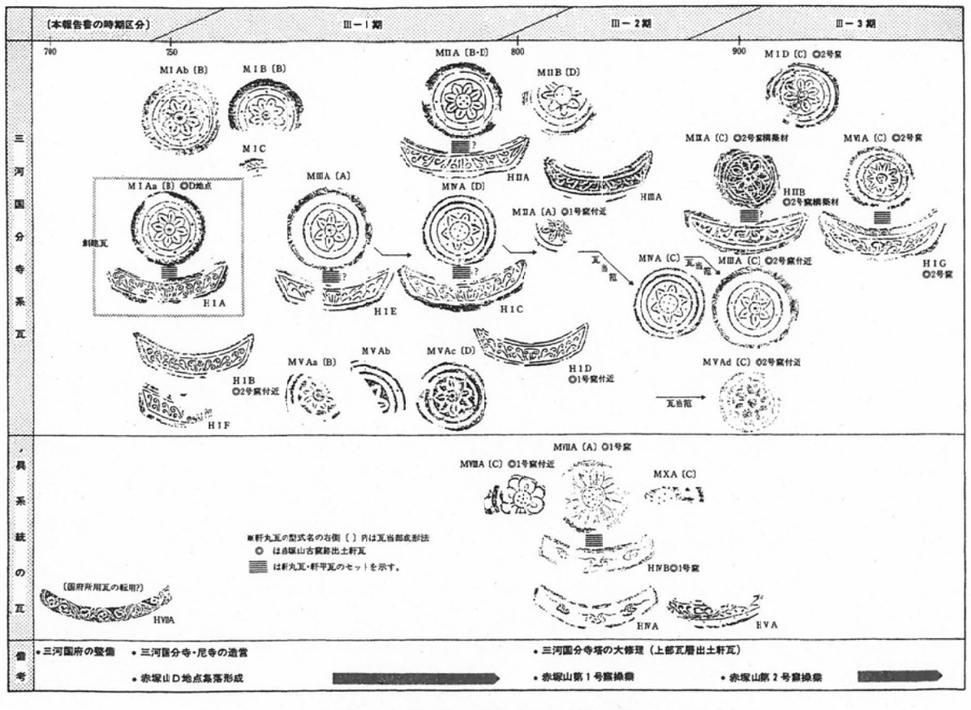


図４　三河国分寺所用軒瓦編年図（林・前田 1994より）

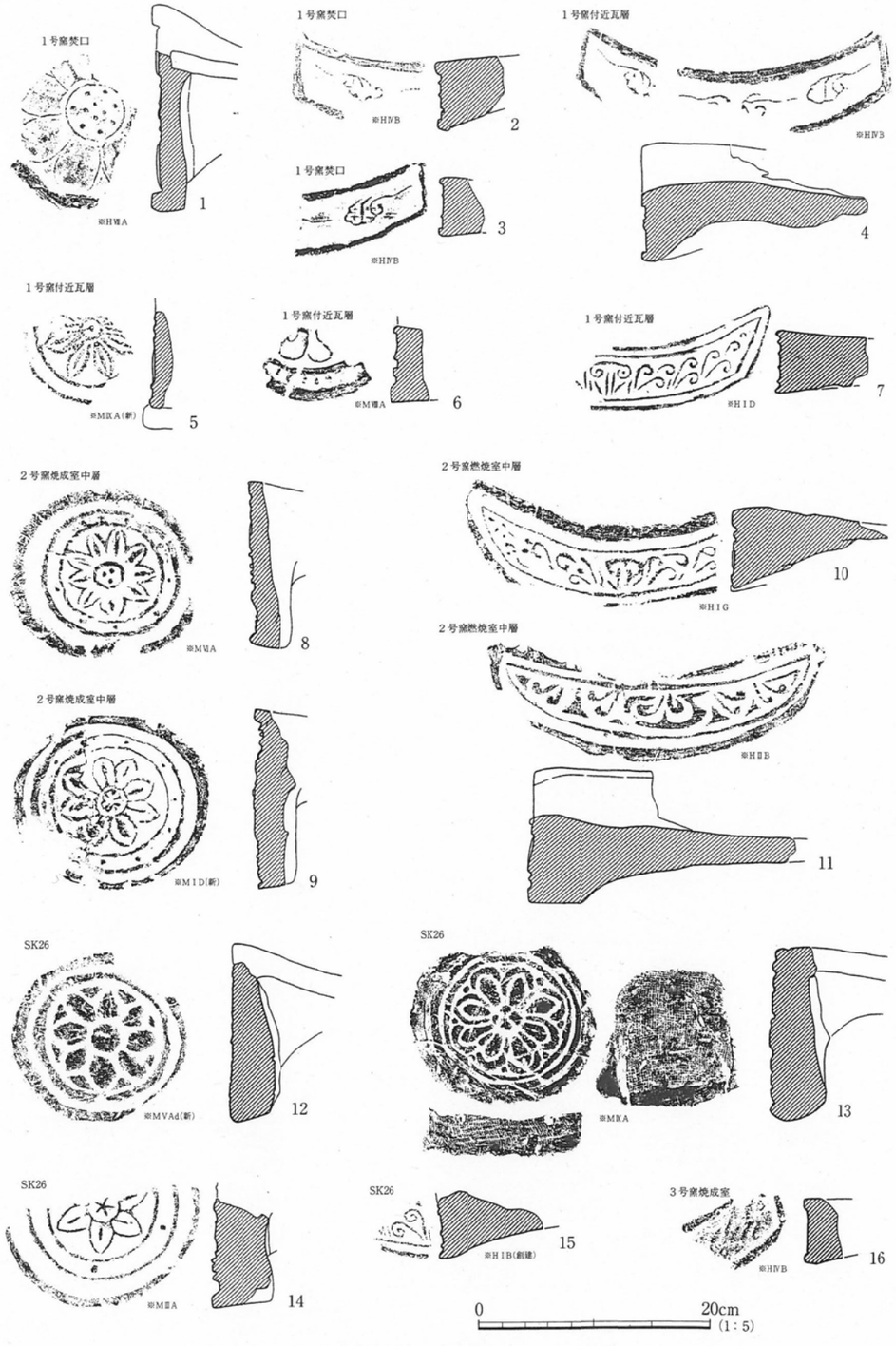


図５　出土遺物拓影・実測図（林・前田 1994より）